

第42回神戸女学院大学英語英文学会 (KCSES) 大会報告

英文学科長 溝口 薫

今年度も例年同様11月の最終金曜日に英文学科主催の第42回英語英文学会 (KCSES) を開催した。本学会は、英文学科卒業生、大学院生、大学院修了生の研究発表の場として約40年前、本学科に大学院修士課程が設けられた折にほぼ同時に設立されたが、以来変わらず在学生も会員としており、学部学生が授業以外に学問的関心を自主的に発展させることができる大切な機会となっている。今年度の学会準備担当は、言語・コミュニケーションコースで、大会の目玉である特別講演には、大阪大学大学院、言語文化研究科言語文化専攻准教授の越智正男先生をお迎えし、『日本語の「移動」現象に見る文法の不思議』という題目の大変興味深いお話を伺った。

「が」、「を」、「の」という格助詞の使い方は一見曖昧であるが、母語話者は直感的に使い分けている。越智先生は、その直感的使い分けについて、いくつかの例文の妥当性を参加者にどう思うかを尋ねられながら、格助詞の奇妙なふるまいの背後にある一定の言語規則性について明らかにされ、そのうち、それを生成文法理論による仮設ルールを用いて一括して説明できること、またそのルールが、日本語という言語に限らず英語にも適用できる、普遍的なものであることを示された。身近な事例を用いつつ、生成文法理論の可能性について、言語学を専門としない参加者にもわかり易くご紹介下さり、一同、言語学の貴重な知見のみならず、その学問特有の面白さに触れることができた幸福な時間を過ごした。

学会前半部には、本学大学院研究科において研鑽を積みそれぞれ2016年度に博士号を取得した2名の意欲的な研究発表を聴いた。発表者とタイトルは以下のとおりである。佐藤エリ氏、「想像の世界から現実へ — G. H. Lewesの議論を通して *Adam Bede* を読む」ならびに、高雅妃氏、“The Study of the Relationship between the Psychological Distance and Deixis in Japanese and Korean”。一人は19世紀イギリス作家論、そしてもう一人は日韓言語比較

と、分野が異なる研究を聴くことができるのも英米文化文学コース、そして言語コミュニケーションコースなどのある本学科の学会ならではの、である。在学生の皆さんには、ぜひ4年間のキャンパスでの学びの方向、あるいは、大学卒業後の進路について考える機会として、さらなる積極的な参加をお勧めしたい。

特別講演

日本語の「移動」現象に見る文法の不思議

越智 正男

(大阪大学大学院言語文化研究科 言語文化専攻 准教授)

私たちは普段あまり意識せずに母国語を使用している。しかし少し考えてみると、言語には不思議な点が数多くあることに気づく。言語には単語や表現を習う(覚える)という側面がある一方で、決して周囲から教わったことのないような言語の知識(あるいは「特性」とでも言った方が良くかもしれない)が私たちにはたくさん備わっているのである。さらに興味深いのは、そのような(無意識的な)言語の知識(特性)が母語話者の間で幅広く共有されている。今回の講演では「が」、「を」、「の」のような格助詞に着目してこの点について具体的に考えてみたい。

るが表にはるが元しひる。

、すべてのコインの裏に
確率を教えて。

はね、_____よ。

- (a.) $\frac{1}{8}$
- (b.) $\frac{1}{7}$



基本的な文における格助詞の分布について言えば、「が」は主語に付き、「を」は目的語に付き、「の」は(広い意味での)所有関係を表す、と考えることがで

きるかもしれない。しかし、いろいろな例文を作ってみると、このような考え方には様々な反例があることがわかる。例えば、(1b)は適格な文ではないが、この文を「可能構文」にするると目的語に「が」をつけた(2b)のような文も適格になる。

- (1) a. 太郎はドイツ語を話します。
b. *太郎はドイツ語が話します。
(2) a. 太郎はドイツ語を話せます。
b. 太郎はドイツ語が話せます。

また、日本語の名詞修飾節においては「が」に加えて、主語に「の」がつく場合もある。

- (3) a. 看守がいない時に逃げよう。
b. 看守のいない時に逃げよう。

さらに、名詞修飾節における可能構文では目的語に「の」がつくことも可能である。

- (4) a. この中で、3つ以上の言語が話せる人はいますか？
b. この中で、3つ以上の言語を話せる人はいますか？
c. この中で、3つ以上の言語の話せる人はいますか？

それでは、複数の格助詞が使用できる場合、格助詞の選択は全く自由なのであろうか。そうではないことを示す一例を以下に紹介したい。3つのコイン(例えば、大、中、小の3つ)を同時にトスして表になるか裏になるかみるという状況で(5)や(6)の例文を考えてみよう(コインには何の細工も施されていないとする)。まず名詞修飾節の主語に「が」が付いている場合であるが、上述の状況では(5a)が極めて妥当な発話であるのに対して(5b)は適切な発話ではないと多くの話者が感じる。

- (5) a. すべてのコインが裏になる確率は1/8だ。
b. すべてのコインが裏になる確率は1/2だ。

この例文の「が」を「の」に置き換えて考えてみると、発話の適切さのパターンが変わる(詳細はMiyagawa (1993)他を参照していただきたい)。

- (6) a. すべてのコインの裏になる確率は1/8だ。
b. すべてのコインの裏になる確率は1/2だ。

この場合、(6a)に加えて(6b)も適格であると多くの話者が感じる。ただし解釈が異なる。(5a)や(6a)は「3つのコインがすべて裏になる、そういう事態が起きる確率は1/8である」、という意味である。(6b)は「3つのコインのどれについても、それが裏になる確率が1/2である」という解釈を持つ。しかし、(5b)はそのような解釈を持たないので不適切な発話と判断されるのである。これは、複数の格助詞が使用できる状況においても、格助詞の選択の背後には何らかのルールが存在し、そのルールが母国語話者の間で共有されている、ということを示唆する。これ

はとても興味深いことではないだろうか。(5)と(6)の間の細かな差違について周囲の人から教わったという人はおそらくいないだろう。それにもかかわらず、私たちはこのような言語に関する「直感」とでも呼ぶべきものを(普段意識しないとしても)持っているのである。

このような言語事実に関して、本講演では「生成文法」と呼ばれる枠組みにおける取り組みの概要を紹介したい。まず、我々ヒトという種には生得的な(つまり、生まれつきの)言語の基盤になるもの(文法)が備わっており、さらにこの基盤(文法)には単語と単語を結び合わせるにより階層的な文法構造を生み出す働きがあると考えられる。そして、格助詞の選択はこの階層的な構造に依存していると考えられる。話を簡略化するために、本講演では以下のような規則を提示することにより論を進めたい。

- (7) a. VPの中にあるNP: 「を」がつく
b. VPの外にあるNP: 「が」がつく
c. NPの中にあるNP: 「の」がつく

先の例に戻って考えてみよう(以下の分析はMiyagawa (1993)やOchi (2001)に基づく)。(5)では名詞修飾節の主語に「が」が付いているが、これは(英語等の主語と同じように)節点Sの中に主語がある(そして主語はVPの外にある)ことを示している。概略を示すと以下ようになる(ここでは「裏になる」の「に」についての議論は省略する)。

- (8) [NP [S すべてのコインが[VP 裏になる]] 確率]

一方、(6)では主語に「の」が付いている。この場合の主語は統語操作の適用により名詞修飾節(= S)の中からSの外へと「移動」していると考えられる。そして主語が占める構造的な位置が変わり、主語は「確率」という名詞を核として持つ名詞句の中に位置する。その結果、(7c)のルールによって主語に「の」が付く。

- (9) [NP すべてのコインの [S ti [VP 裏になる]] 確率]

しかしこのような構造の違いがなぜ先の容認性の違いに繋がるのであろうか。本発表では、(5)や(6)にあるような日本語の例とLasnik (1999)で論じられている類いの英語の例文との比較を通してこのような仮説についてなるべくわかりやすく論じてみたい。

発表要旨

想像の世界から現実へ - G. H. Lewesの 議論を通して *Adam Bede* を読む

佐藤 エリ

(神戸女学院大学大学院文学研究科
英文学専攻博士後期課程修了、博士(文学))

本発表では、英国ヴィクトリア朝女流作家George Eliotによる初期小説 *Adam Bede* (1859)のヒロイン達であるDinah Morris とHetty Sorrelの「見る行為」と、彼女達の自己の関わりを、EliotのパートナーであったGeorge Henry Lewes が、その著作 *Problems of Life and Mind* において展開した、「記憶」や「想像力」の議論を用いて検証した。

DinahとHettyは、一見対照的なヒロイン達に思われるものの、いずれも想像力によって自らの方向性を定めており、社会における自己認識に欠けているという点において類似していることが分かった。しかしながらHettyは、放浪の旅の中で、自らの過去の記憶を意識するようになり、またDinahも、特にHettyの救済の後、想像の目で神の存在を見るのではなく、Adamへ抱いた思いを呼び覚まし、現実の世界を見るようになる。

人間の精神活動の一部を構成する「記憶」や「想像力」についてのLewesの議論を踏まえて*Adam Bede*を読むと、ヒロイン達が「想像力」の過度の働きの原因で一度は失った現実を認識する力を取り戻し、さらには過去を修正し、現在と統合させていく過程を見出すことができる、と結論づけた。

発表要旨

The Study of the Relationship between the Psychological Distance and Deixis in Japanese and Korean

高雅妃

(神戸女学院大学大学院文学研究科
英文学専攻博士後期課程修了、博士(文学))

字義的意味と発話での意味では同じ言葉でも差異がある。Levinson (1983)でも、字義的意味と発話での意味には差異があると述べているが、この差異に心的距離が影響を与えている。本研究ではすべて

の言語に心的距離が存在すると考え、心的距離が文法の語用論的特質の一つであること、そして、心的距離は文法の語用論的特質であるダイクシスの一つであることを証明することが目的である。

これらのことを証明するために日本語で同意語・類義語とされている「あとで」と「のちほど」を取り上げて、例を挙げながら論証した。「あとで」は、話者と「あとで」が修飾する動作の心的距離が近くても遠くても用いられる。対して、「のちほど」は話者と「のちほど」が修飾する動作の心的距離が遠い場合のみ用いられることが明らかになった。これらの結果から、心的距離が文法の語用論的特質であるダイクシスであることが証明できた。

国際学会発表

* Shawn BANASICK 氏

“The Fukushima Disaster and Food Safety in Japan: An examination of Consumer Risk Perception.”

イギリス、グラスゴーで開催された33rd Annual Q Conference for the Scientific Study of Subjectivity (2017年9月7-10日)にて研究発表。

* 東森勲 氏

“Metaphor and Context in Anti-Proverbs: A Relevance-Theoretic Account.”

オランダ(アムステルダム大学)で開催されたMetaphor Festival (2017年8月)にて研究発表。

“Understanding Anti-Proverbs: A Relevance-Theoretic Account.”

ギリシャ(アテネ大学)で開催されたBeyond Meaning Conference (2017年9月)にて研究発表。

* 古村敏明 氏

“Robert Lowell as a Global Poet: Translations and Possibilities of Cross-Cultural Empathy.”

アメリカ、ボルティモアで開催されたNortheast Modern Language Association, 47th Annual Convention (2017年3月23-26日)にて研究発表。

“Images of Crisis: Poetic Ways of Seeing Disasters.”

アメリカ、ホノルルで開催されたPacific Ancient and Modern Language Association, 115th Annual Conference (2017年11月10-12日)にて表題のセッションの座長を務める。

“Sights of Resilience: Post-3/11 Japanese Poetry and Ethical Empathy.”

アメリカ、ホノルルで開催されたPacific Ancient and Modern Language Association, 115th Annual Conference (2017年11月10-12日)にて研究発表。

*小杉世 氏

“Environmental Arts and Literature Across the Pacific.”

フランス (ストラスブール大学) で開催されたThe 23rd annual conference of the New Zealand Studies Association (2017年7月7-10日)にて研究発表。

“Lemi Ponifasio’s Planetary Imagination and Performing Arts in Oceania.”

サモア (サモア国立大学) で開催されたPAA Conference-Making the Invisible Visible (2017年11月27日-12月1日)にて研究発表。

*奥本京子 氏

“A Proposal on the Process and the Method for Reconciliation by Peace. a: From a practice at NARPI integrating Ho’o Pono Pono and Samoan Circle Process.” 「平和アプローチによる和解の過程と手法についての一試案: ホーポノポノとサモアン・サークルプロセスを統合したNARPIでの実践から」

中国、南京、漢府飯店紫金庁にて開催された「東アジア平和の新たなビジョン」学術シンポジウム 並びに第2回日中両国平和学者対話会 (2017年2月22-25日)にて研究発表。

*佐藤エリ 氏

“Extension of Sympathy in* Middlemarch *: George Eliot’s Response to Contemporary Science of Vision.”

ハワイ、ホノルル (シャミネード大学) で開催されたPacific Ancient and Modern Language Association, 115th Annual Conference (2017年11月10-12日)にて研究発表。

*下村冬彦 氏

“Do Overlapping and Repeating Practices Help Students Develop Better English Listening Skills?: Exploring the Interview Data and Recorded Shadowing Data to Explore the Factors that Best Help Students Improve English Listening

Skills”

ハワイ州ホノルル市で開催されたHawaii International Conference on Education (HICE、2018年1月4日-7日)にて学会発表。

“Can teachers help students cope with ‘Action plan for education global citizens’ policy?: Exploring the potential of new listening pedagogy in EFL classroom”

カナダ、University of Torontoで開催されたMultidisciplinary Approaches in Language Policy and Planning Conference (LPP、2017年8月23日-25日)にて学会発表。

*下村冬彦 氏/田岡千明 氏(共同)

“How does the ‘Action plan for educating global citizens’ affect college English classrooms?”

カナダ、University of Torontoで開催されたMultidisciplinary Approaches in Language Policy and Planning Conference (LPP、2017年8月23日-25日)にて学会発表。

*立石浩一 氏

“Focus Prosody in Japanese Reconsidered.”

アメリカ、ソルトレイクシティ、Grand America Hotel Salt Lake Cityで開催された 2018 Annual Meeting of Linguistic Society of America (2018年1月4-7日)にて水口志乃扶氏と共同ポスター発表。

*Yolanda TSUDA 氏

“The Early Filipino Migrants to Japan.”

ハワイ (ハワイ大学ヒロ校) で開催されたInterdisciplinary Conference on Philippine Studies (2017年10月26-27日)にて研究発表。

*Vaage GORAN 氏

“Towards a multilingual framework of humor - case studies of Japanese and Western encounters.”

ポルトガル、ブラガで開催されたICMME 2017-International Conference on Multilingualism and Multilingual Education (2017年5月11-13日)にて研究発表。

“Sociolinguistic properties of hate speech in Japan.”

キプロス、ラルナカで開催された Interdisciplinary Conference on Hate speech: Definitions, Interpretations and Practices (IHDIP)

(2017年6月9-11日)にて研究発表。

“The pragmatics of Tsukkomi: a conversation analysis of interaction in the My Funny Talk corpus.”

ポルトガル、リスボンで開催されたThe 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies (EAJS) (2017年8月30日-9月2日)にて研究発表。

*吉田純子 氏

“An Autistic Youth Narrates His Inner Life: Marcelo in the Real World.”

カナダ、トロント(ヨーク大学)で開催されたInternational Research Society for Children’s Literature (7月29日-8月2日)にて研究発表。

『平和教育シリーズ No.7 平和教育学事典』(共著、京都教育大学教育社会学研究室、2017年3月18日)

◇立石浩一 氏

“The Wiley Blackwell Companion to Syntax,” 2nd Edition. (Martin Everaert and Henk C. Van Riemsdijk (eds.), Wiley-Blackwell, 2017年12月15日) Chapter 53 “Double Nominatives in Japanese.”

◇鶴野ひろ子 氏

“Emily Dickinson and Japanese Flowers: Her Herbarium and Perry’s Expedition to Japan,” The Emily Dickinson Journal, Vol. 26, Number 1, 2017, pp. 51-79.

◇魚住香子 氏

「学習者用読み物 (graded readers) のスタイル」『英語のスタイル—教えるための文体論入門』(豊田昌倫・堀正広・今林修編著、研究社、2017年3月刊) pp. 154-165

◇吉田純子 氏

『アメリカ思春期文学にみる〈少年の旅立ち〉』(阿吽社、2017年4月刊) pp. 273

会員による出版紹介

◇風呂本惇子 氏

『新たなるトニ・モリスン—その小説世界を拓く』(風呂本惇子・松本昇・鶴殿えりか・森あおい共編著、金星堂、2017年3月刊) pp. 218-235

◇東森勲 氏

『対話表現はなぜ必要なのか』(編著、朝倉書店、2017年3月刊)

『発話の解釈はなぜ多様なのか』(中島信夫共編著、朝倉書店、2017年3月刊) pp. 147-163

◇川越栄子 氏

「夢をかなえる英語教育ESP/EAP」『総合医学英語テキストStep2』(日本医学英語教育学会編、メジカルビュー社、2017年10月刊) pp. 75-88

◇小杉世 氏

「ジャネット・フレーム-アルファベットの外縁から見た世界」『オーストラリア・ニュージールランド文学論集』(三神和子編著、彩流社、2017年3月刊) pp. 135-179.

◇奥本京子 氏

『国際共生と広義の安全保障』(共著、東信堂、2017年1月31日) pp. 49-75

『関西学院大学神学部ブックレット9 平和の神との歩み:1945-2015年 第50回神学セミナー』(共著、キリスト新聞社、2017年3月31日) pp. 37-68

神戸女学院大学英語英文学会 会則

(1995年 4月 1日施行)

(2005年 9月22日改訂)

(2010年 3月 2日改訂)

- (1) 名称
本学会を神戸女学院大学英語英文学会と称する。
- (2) 目的
本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文学専攻修士生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。
- (3) 構成
本学英文学科卒業生、大学院英文学専攻修士有志および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。
- (4) 活動
年一回、英語英文学会大会を開催する。
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英語英文学会その他の活動の内容を報告する。
その他。
- (5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。
(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

内規

I. 大会での発表について

- (1) 発表希望者は毎年7月1日までに、発表論文の簡単なレジュメと略歴を添えて、英文学科事務室まで申し込み、KCSES運営委員会で審査の上、決定する。

II. 維持費・参加費について

- (1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。
- (2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。
- (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費などの経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
- (4) (3) に関しては、KCSES専用の口座を利用する。



編集後記

会員国際活動報告・出版物のご連絡、ありがとうございました。

さて、神戸女学院大学には英文学科学生の学会及び研修会参加に関する経費をサポートする制度「英文学科学生生活動補助費」がございます。国内外で、学生に多くの研鑽、活躍の場が与えられるようにこの制度をお支えいただけませんか。毎年お願いしております神戸女学院教育振興会の寄付に「英文学科学生のために」と一言書いていただけますとこの制度に金額を組み込ませていただきます。

会員の皆様のご協力に感謝申し上げますとともに、今後益々の研究の発展をお祈りいたします。

KCSES Newsletter編集委員

(2017年度運営委員)

○Nathaniel CARNEY ○栗栖和孝 ○溝口薫 (ABC順)

KCSES Newsletter No. 33

編集発行 神戸女学院大学英語英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

<http://www.kobe-c.ac.jp/english/gakkai/gakkai.html>

2018年3月発行